

特別支援級児童の自己肯定感の向上と認め合う人間関係の育成

～「大島放送局3，2，1，0！」の番組づくりを通して～

神奈川県川崎市立大島小学校

〒210-0851
神奈川県 川崎市川崎区浜町1-5-1

<http://www.keins.city.kawasaki.jp/school/info/ke200901.html>

1. 研究の背景

本校の特別支援級の児童は13名の児童(学年構成：1年4名、2年1名、3年1名、4年2名、5年5名)が在籍している。交流級で過ごす時間がそれぞれ違うため在籍児童全員が集まる時間は少ないが、朝の会などの生活単元学習や合同図工、合同体育、合同給食、個別学習室掃除などで少しずつ同じクラスとしての仲間意識が生まれ始めている。全体的に明るく、元気な子どもたちで、人とかかわることに積極的である。しかし興味・関心のあることには積極的に活動するが、興味・関心の無いことには全く目が向かない児童、その場では話を聞いているが指示の通らない児童、気持ちに乗っている時には友だちの手助けができるが、何かで反目すると学習から外れてしまう児童もいる。

2. 研究の目的

「大島放送局3，2，1，0！」は児童が一昨年度から続けてきた活動である。本校特別支援級の児童は自分たちが支援級でどんなことを頑張っているのかを知って欲しいという願いをもっており、それを放送局という形式で発信してきた。昨年度は、児童がアナウンサーになりきって友だちに取材したり、その様子を撮影したりした。5年生は昨年度までの大島放送局の経験があり、次にどんな活動をしたいか具体的に意見を提案することができた。しかし今までリーダーとなって引っ張ってくれた6年生が卒業し、大島放送局の経験の無い新入級の児童が7名も加わった。そのため、思いを具現化することに課題のある児童、大島放送局の活動をイメージできない児童がいた。それぞれ実態の異なる児童が集まった小集団が、大島放送局の学習を通して、



友だちと一緒に活動することを楽しみ、人と関わり合う喜びや協力し合う喜びを感じ、それらをいろいろな人に発信し広げていく喜びにつなげていってほしい。そのためにタブレット型端末やカメラなどを使い、目的や相手を意識して、自分の伝えたいことを簡単なプロモーションビデオとしてまとめ、先生や友だちに感想を聞く活動を通して、自分や友だちの良さに改めて気づき、個別学習室に愛着をもてる児童を育てたい。

3. 研究の方法

(1) ICT 機器を使いそれぞれが興味・関心をもてる工夫

これまでのビデオカメラでの撮影だけでなく、タブレット型端末での映像撮影にも挑戦し、簡単な撮影や映像の確認作業ができるようにする。指で簡単に操作できるタブレット型端末を使うことで、低学年でも記録の確認ができ、興味関心をもって進んで活動に参加できるのではないかと考える。また、簡単にPVの編集ができるアプリを使うことで、これまで以上に子どもたちが自分たちで課題を見つけ、考え、探究していくことに役立たせる。



(2) 協力して取り組めるようにする工夫

経験のある5年生が中心になって低学年の児童にアドバイスをしながら全員がそれぞれの役割に挑戦する。児童同士が協力し合い、みんなで決めた内容のPVを作ることで友だちの良さや頑張りに気づき、お互いに認め合うことができるようにする。



(3) 自己肯定感をもてるようにする工夫

学習の振り返りの時間には、全員が発言する機会をもつけ、子どもたちが友だちと意見や感想を共有、共感できるようにする。また、自分の役割が書かれたスタッフカードを携帯することで、個別学習室の一員としての所属感を高める。

4. 研究の内容・経過

大島放送局3・2・1・0 シーズン1

◆入級した1、2年生に大島放送局とはどのようなものかを伝えるために5年生が中心となって活動した。活動の内容としては、昨年度の個別学習室の活動や大島小学校の約束を伝えたり、1、2年生の勉強風景をインタビューして伝えたりというものであった。大島放送局の発表の中では1、2年生をクイズの回答者として参加させたり、運動会のダンスの取り組みの発表の場面で一緒に踊ったりという場面を設けて、低学年の児童も大島放送局に



参加した。このシーズン1の活動を通して、5年生は、自分たちが個別学習室の最高学年で、大島放送局を作り上げていく上で、中心となる存在であることを意識しはじめた。また、低学年の子どもたちは、初めて大島放送局という活動を見て、体験して、次は自分たちも番組作りに携わりたいという思いが芽生えた。

大島放送局3・2・1・0 シーズン2

- ◆1・2年生も参加できる大島放送局ということで、タブレット型端末を使った、短いムービーを作成するという活動を行った。
- ◆個別学習室で開催する個別祭りのプロモーションビデオを作った。



タブレット型端末

- ・写真や動画の撮影を行えるようにするために使用。
- ・撮れた写真や動画を使って、短いムービーを比較的簡単に作成した。



PV 作り

- ・タブレット型端末により、短い動画や写真をつかって簡単に1分程度のムービーを作った。
- ・短いムービーを作り、見合うことで、番組のクオリティを上げていった。

大島放送局3・2・1・0 シーズン3

- ◆3月に行われる川崎全市の特別支援級の合同行事「卒業と進級を祝う会」のプロモーションビデオ作りを行った。「卒業と進級を祝う会」では、エアーバンドでのダンスとその合間の寸劇での発表をした。そのエアギターでの練習の様子を長期間に亘り撮影し、「ミュージックビデオ」を作製することにした。子どもたちは、初めミュージックビデオという言葉に馴染みがなかった。そこで、それらがどのようなものを映像で紹介した。ストーリー性のあるもの、いろいろなアングルから同じ場所で撮影したもの、たくさんの国で撮影したもの、大島小学校90周年記念式典の記念歌のために作ったミュージックビデオを見せた。すると、子どもたちからは、「やってみたらおもしろそう」という声や、「学校のいろいろな場所で撮りたい」という意見が多く出た。さらに、「エアーバンドでの演奏シーン以外の前後にドラマを入れた内容にしたい」という意見も出た。そこで、子どもたちからアンケートを取り、「こべつスタジオチーム」(動画編集担当)、「シナリオチーム」(台本作成担当)、「アクションチーム」(演技担当)、「カメラチーム」(撮影担当)、「アイテムチーム」(道具担当)というチームを作り、それぞれが希望によって1つ又は複数のチームに所属するかたちで活動を行った。一人の子が場面により演技者になったり、撮影者になったりすることもある。高学年と低学年をバランス良く組み合わせ、協力して一つのミュージックビデオを作り上げた。





5. 研究の成果

本研究では、タブレット型端末という新しい教具の使用により、低学年から高学年の子どもたちが「試しに使ってみる」という思いから学習がスタートした。そのことで、お互いに学び合いが生まれた。また、動画の作製を通して、異学年間の交流が深まった。初めは1、2年生に教える立場の5年生という関係であったが、夏休み明けから実態に応じたグループ分けや役割分担により、お互いが責任をもって1つの目標に向かう姿が生まれた。そして、タブレット型端末の活用により、低学年から高学年までの子どもたちが撮影や動画の編集に参加することができた。そして、タブレット型端末で撮影し、その場でチェックしながら、良いところ、直すところを言い合ったことで、安心して何度も繰り返し学習を行うことができた。また、振り返りを全員が発表するというかたちをとったことで、頑張っていること、困っていることを共有することができた。さらに根拠をもって意見を発信する子が増え、それをお互いに認め合う関係ができた。

6. 今後の課題・展望

異学年での集団学習という形式での総合的な学習を行ってきたが、役割分担において高学年の負担が大きかった。低学年から高学年までの子どもたちが主体的に取り組めるような学習の材について、もっと検討する必要がある。また、低学年と高学年を分けて活動をスタートし、お互いが必要に応じて関わりがもてる形式での学習スタイルについての検討をしたい。個から学習をスタートし、集団の自然発生に応じて異学年集団での学習を行っていく方が、子どもたちの結びつきもより強くなると考える。

今年度の経験を土台にし、低学年・高学年それぞれが主体的に取り組めるような単元構想と、子どもたち一人一人への支援の方法について検討し、子どもたちが、自分たちのことをもっと知ってほしいという思いを実現するために、子どもの思いに寄り添った単元構想が必要である。そして、個別学習室以外の人とのかかわりをもたせる、もっと外に対する発信をする必要があった。そのかかわりの中で、大島放送局の学習活動がもっと深まり、発展していくと考える。